

海外だより

海外研修雑感；ドイツ・ハイデルベルク大学

鹿児島大学教育学部 廣瀬 勝弘

1. はじめに

筆者は、所属先の海外研修制度（鹿児島大学若手教員海外研修派遣事業）を活用し、2013年5月から2014年1月迄の9ヶ月間、ドイツのハイデルベルク大学スポーツ科学研究所に客員研究員として滞在する機会を得た。本小論では、筆者が現地で感じた出来事を中心に綴らせていただきたい。特に、今回の研修滞在の主要な目的である、「Ballschule Heidelberg」の内容を簡易に紹介ができればと考える。

まず、ハイデルベルクの街を紹介したい。ハイデルベルクは、ドイツ西南部に位置する人口15万人弱の街である。フランクフルト国際空港からは、特急電車を



〈写真3〉 ハイデルベルク近郊のブドウ畑



〈写真1〉 ハイデルベルクの旧市街地①



〈写真2〉 ハイデルベルクの旧市街地②

利用すると50分程で到着することが可能である。街（「写真1・2」）は、戦災被害から逃れ、ハイデルベルク城をはじめ古い街並みは現役活用され、街全体が文化遺産のようであり、大変美しい景観である。「写真1」のネッカー川は、ワインの生産地として有名なライン川と隣街であるマンハイムで合流するため、ハイデルベルク近郊にもブドウ畑（「写真3」）が数多くあり、ワインは街の特産品の1つとなっています。また、日本の文具店で数多く並ぶ、万年筆やボールペンなどのメーカーである「LAMY」は、ハイデルベルクを本社とする企業である。

ハイデルベルクは、熊本市と姉妹都市関係にある。共に、街中から城を見上げながら生活をする点が似ているといえる。日本からの観光客も多く、南ドイツのツアー旅行には必ず含まれる街の1つである。観光ガイドブックには記載はないが、街の郊外には、アメリカ軍の基地や原子力発電所が点在しており、滞在中には、日本の原発事故についての質問や意見を数多く受けることとなった。

次に、筆者の研修先であるハイデルベルク大学について、紹介をしたい。ハイデルベルク大学は、1386年に創設されたドイツ国内で1番古い大学である。「写真1」のハイデルベルク城下の旧市街地内と郊外の2カ所にキャンパスが分かれ、学部や関連する研究所が集中している。筆者は、主に郊外のキャンパスに滞在

していた。郊外といっても、2つのキャンパス間は、自転車を利用すると10分程度で移動可能な距離である。

滞在当時、ハイデルベルク大学には、約30000人の学生が学んでいた。筆者の研修先である「スポーツ科学研究所」(日本式でいえば「スポーツ科学部」)には、約500人(学年定員100人×5年)の学生が在籍していた。ドイツの大学は5年制であるため、学生の年齢は、概ね20歳から25歳くらいであった。さらに、体育教員になるためには、その後、1年半の教育現場での研修(教育実習に該当)が必要となる。スポーツ科学研究所の学生たちの多くは、体育教員やスポーツ指導者を希望しているため、大学はそのための通過点という位置づけで考えているようであった。学生たちの学ぶ姿勢は、目標が明確であるためか、非常に高く感じた。滞在中のクリスマス休暇直前に、複数の学生に対して年末年始の予定を尋ねたところ、口を揃えて「レポート作成と勉強です」と即答されたことは、彼らの学ぶ意欲の高さを物語る出来事であるといえる。

また、学部の時間割には、「お昼休み(昼食時間)」の時間設定がみられなかった。昼食は、空き時間に各自で済ませているようであった。その多くは、自宅から食料を容器に詰めて持参し、学内のベンチや芝生の上で済ませていた。ドイツ学生たちの合理的に用件を済ませる姿勢には、感心させられるばかりであった。

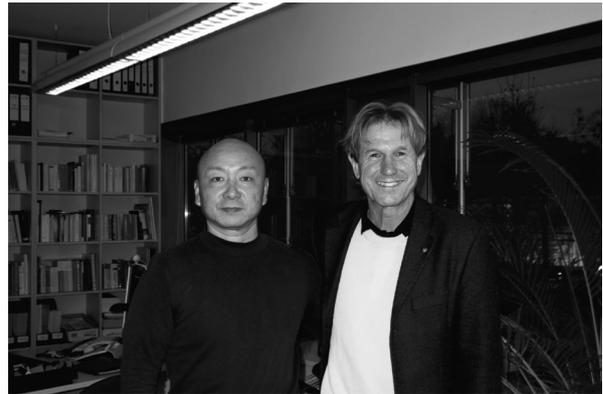
2. 『バルシューレ・ハイデルベルク』の理論

ドイツでは、日本と同様、子どもの運動不足や体力・運動能力の低下の実態状況がみられる。加えて、肥満などの健康への悪影響、情緒不安定、社会性の欠如などの子どもが散見されており、その状況から脱却を旨とすることが課題と捉えられている。研修先であるハイデルベルク大学スポーツ科学研究所では、この課題の解決を旨とした取り組みが行われており、その1つが「バルシューレ・ハイデルベルク(Ballschule; <ボール学校>という意味)」というプロジェクトである(以下BS-HDとする)。

BS-HDは、1998年にProf. Dr. Kraus Roth(「写真4」)により、60人の子どもたちへの指導から開始された。その後、地域のスポーツクラブ、小学校、幼稚園を対象として活動が順次拡大された。現在は、2歳から11歳迄の子どもたちを対象として、ドイツ国内においては、10000人以上の子どもたちが参加する大きなプロジェクトとなっている。プロジェクトには、Prof. Dr. Kraus Rothを含め10名の専任スタッフが役割を分担し

ながら活動を展開している。近年は、ドイツ国内だけではなく、オーストリア・メキシコ・チリ・ブラジル・ウクライナ・日本など、国際的にも広く紹介がされるようになってきている。BS-HDは、学校で実施される体育授業ではなく、「スポーツクラブの1つである」という位置づけであると捉えられる。

BS-HDの指導コンセプトは、個別のスポーツ種目の学習に入る前に、全てのボールゲームに共通する最



〈写真4〉 筆者と Prof. Dr. Kraus .Roth (研修の受入教員)



〈写真5〉 指導者講習会(講義)



〈写真6〉 指導者講習会(実技)

大公約数的な基本要素を、プレイしながら習得することができるようにプログラムが考案されているところに特徴があるといえる。そのコンセプトは、以下の3つの領域で提示されている。第1のA領域は、「プレイ力の育成」であり、プレイを繰り返しながら、乏しい運動経験を分厚くし、運動技術の基礎基本の習得が目ざされる。第2のB領域は、「身のこなし（運動協調性）の育成」であり、全ての技術に通底する一般的な運動協調的要素の獲得が目ざされる。第3のC領域は、「モジュールスキルの育成」であり、全てのボールゲームの運動技術に共通するスキル要素、日本式で別な言い方をすれば「コツ」と「カン」を同期させるための内容で構成され、それらを「モジュールスキル」という名称で呼んでいる。モジュールスキルには、「軌道の認識」「味方の位置・動きの認識」「敵の位置・動きの認識」「ボールアプローチの決定」「着球点の決定」「キャッチ・キープのコントロール」「パス・シュートのコントロール」などが含まれる。

BS-HDの活動が急速に拡大した理由は、「楽しみながら子どもの運動経験を分厚くする」ことを目的としたゲーム教材を、研究結果に照合させ、的確に順序づけ配置したことであると考える。また、BS-HDは、誰もが指導担当が可能なのではなく、そのコンセプト内容と実践の理解を学習した指導者のみが、子どもたちへの指導担当ができるようにしているところが大きな特徴であるといえる。つまり、「指導のための資格」を明確に位置づけ、指導内容と方法を共有化し、その遂行と責任の所在を明確にしたことが、急速に拡大した第2の理由であると考えられる。

「写真5・6」は、その指導ライセンスを取得・更新するための「指導者講習会」の様子である。「指導者講習会」は「1日講習」になっており、90分間の講義の後、60分間の実技講習を3種類（上述の3つの領域別）受講し、最後に30分のまとめの講義が用意されている（ここでも昼食時間は設定されず、15分間の休憩を挟みながら、講習が休むことなく順次継続）。研修会の折に、受講者の方に個別に確認をすると、ベルリン・ハンブルク・ケルン・ミュンヘンなど、ドイツ全土から参加されているようであった。

この日の講習会は、早朝から開始される大変窮屈な日程であったが、積極的な質疑応答が適宜行われ、意欲的な受講態度には大変驚かされた。講習会の最後には、指導資格の保持・継続を意味する修了書が参加者全員に授与され、講習会は終了となった。

3. バルシューレの実際

今回の筆者の研修滞在において、大変参考になったことは、BS-HDがどのような枠組みの中で、実際に展開されているのかを確認ができたことであった。本項では、滞在中にハイデルベルク市内で展開されていた活動について具体的に紹介を進めたい。

BS-HDは、「Baby Ballschule（2～3歳）」「Mini Ballschule（4～5歳）」「Ballschule（6～11歳）」と、対象とする子どもの年齢にしたがい、大きく3つのステージに分け、前述の基本コンセプトを維持しながら、ステージ間を円滑に繋ぐべく、一貫指導を目標として展開されていた。

「写真7」は、「Baby Ballschule（以下B-BSとする）」の様子である。B-BSは、週に1度（30分間）、ハイデルベルク大学の体育館で実施されていた。フロアには、様々な遊具が設置され、加えて、風船や多種多様な形のボールやボールを操作するためのラケットに類した道具などが無造作に置かれ、子どもたちが自由に活動を行っていた。基本的には親子で共に活動を行っ



〈写真7〉 Baby Ballschuleの様子



〈写真8〉 Mini Ballschuleの様子



〈写真9〉 Ballschuleの様子

ていたが、あくまでも親は、子どもの動きのサポートをするということに徹底していた。遊具やボール・遊具を通じて、自分の身体との関係を知ることによって、主眼が置かれているようであった。毎週30分間という時間の中で様々な動きを獲得する子どもたちの観察を通じ、「幼少期の運動経験の必要性」を再確認するばかりであった。

「写真8」は、「Mini Ballschule（以下M-BSとする）」の様子である。写真は、5歳の子どもたちである。基本的には、毎週火曜日と金曜日の週2回、45分間を1コマとして実施されていた。M-BSでは、「自分」と「ボール」の関係構築と共に、ボールという対象物を、意図的に操作するために、様々なゲーム教材が用意されていた。指導者は、毎回、内容を適宜修正しながら、子どもたちが飽きないための工夫を施していることを垣間見ることができた。滞在途中からは、筆者も指導スタッフの一人として参加することができ、大変貴重な経験を持つことができた。

「写真9」は、「Ballschule（以下BSとする）」の様子である。写真は、8歳の子どもたちである。M-BSは1クラス最大10名、BSは1クラス最大15名として、指導が実施されていた。Prof. Dr. Kraus Rothに、対象とする指導人数について確認をすると、「1人の指導者が15名以上の子どもたちの安全を含めた効果的な指導を展開することは難しいと考えている」との回答であった。日本の学校体育では、ボールゲームの指導が難しいと言われている。それは、1人の教員が、数多くの学習者を一度に指導対象としなければならないことにも起因しているとも考えられよう。「写真9」は、地域の小学校の体育館におけるBS活動である。放課後にBSを希望する子どもたちを対象とした「出前授業」のような形態で実施されていた。写真の指導者

(男性)は、ハイデルベルク大学の学生である。当然ながら、彼は、BSの指導者講習会に参加をして、指導者ライセンスを保持していた。「写真8」における指導者もハイデルベルク大学の学生である。学生たちも指導者として、BSプロジェクトの重要な一員として活動を行っていた。このような取り組みは、大学を基点として活動を展開する仕組みとして、個人的には、大変興味深く感じた部分であった。

BSは11歳迄の子どもたちが対象となるが、12歳以降に、継続してスポーツ・運動を実施したいという要望があった場合には、子どもが希望する種目の実施が可能な地域のスポーツクラブを紹介し、運動経験や運動生活が途切れないような仕組みができていたことには大変驚かされた。BS-HDと関係するスポーツクラブには、ハイデルベルク近郊のプロチーム(サッカーブンデスリーガ1に所属する「1899 Hoffenheim」やハンドボールブンデスリーガ1に所属する「Rhein-Neckar Löwen」)なども含まれており、要望があり、能力の高い子どもたちは、当該チームのジュニアチームの活動に加わることが可能であった。プロチームにとっては、BS-HDは、多様な運動経験を持ち、能力の高い子どもたちを獲得する「タレント育成部門」のような位置づけと捉えていると考えることができよう。逆に、BS-HDから捉えるならば、スポーツ・運動を継続するための「橋渡し」をする役割を、プロチームとの関係の中に含ませているように考えることができる。

しかし、実際にBS-HD活動を精察する限りでは、基本的には「多様な運動経験の確保」に主眼が置かれていた。BS-HDは、あくまでも、プロを目ざした子どもたちを育成するのではなく、自分の身体を意図的に動かすことのできる「賢い身体づくり」を志向していることが、現地におけるフィールドワークを通じて確認できた内容であった。

4. おわりに

日本におけるスポーツ中継などにおいて、アナウンサーや解説者などから「ヨーロッパにはスポーツ文化が根づいている」という主旨内容のコメントが度々聞かれる。ドイツでの9ヶ月間の滞在中を通じて、このことに関連して強く感じたことの1つは、「ドイツでは、スポーツ・運動をするための『環境』が整備・保証されている」ということであった。

「写真10」は、ハイデルベルク街の中央を流れるネッカー川(「写真1・2」にも紹介)の河川敷の広場に作

られているビーチバレーの専用コートである。ハイデルベルクだけではなく、他の地域でも、公園や地域のスポーツクラブ内など、多くの所でビーチバレーの専用コートを確認することができた。ハイデルベルク大学スポーツ科学研究所の体育施設にも、4面のコート確保が可能なビーチバレー用の専用砂場があった。「写真10」の砂場の隣には、子どもの遊具が設置されてお



〈写真10〉 河川敷にあるビーチバレーコート



〈写真11〉 週末のサイクリング風景



〈写真12〉 多種多様なボール

り、夏期など気候のよい時期には、たくさんの人が河川敷に集まり、運動・スポーツに興じる姿があった。

「写真11」は、週末にサイクリングを楽しむ家族の様子である。ドイツでは、週末になると、家族や仲間とサイクリングを楽しむ光景が数多く見られる。子どもたちも安心して自転車に乗ることができるようである。その最大の理由は、自転車専用道路が、明確に位置づけられていることである。「写真10」で紹介したネッカー川の河川敷には、15km以上続く自転車専用道路があり、そこでは、小学校低学年期の子どもたちも安心して、サイクリングを楽しむことが可能であった。また、日曜日は、全ての店舗が休業であり、加えて、コンビニエンスストアは皆無であるため、家族や仲間とサイクリングを行い、出向いた先で持参した昼食等を食べ、時間を過ごすというのが典型的なライフスタイルのようであった。日曜日に、店舗が営業していないことも、ドイツの人々を、スポーツ・運動に志向させることの一助になっているように感じた。

「写真12」は、BS-HDの活動において用いられている道具（ボール）である。その中には、「ボール状」のものも散見される。M-BSやBSに参加する子どもたちは、同学年ではあるが、発育発達面において若干ながら差が生じているため、学習が円滑に進まない場合が発生することがある。例えば、ボールを投げると同じ課題であっても、その課題解決のために、学習者にとって最適な大きさのボールを使用することができれば、発育発達面による学習のつまずきを回避することができると考えられる。特に、運動・スポーツの学習場面においては、道具によって、その成否・効果は大きく左右されると言えよう。とりわけ、初等教育時の子どもたちにとって、運動学習時の「成功体験の保証」を確保することは、教師にとって重要な授業づくりの視点であると考えられる。その成功体験を保証することの観点の1つが、「写真12」に代表されるような「道具の工夫」であることは容易に理解することができる。新しい動きを習得することを学習の最優先事項として捉え、その学習が成功裡に展開するよう、「環境の整備（学習者に道具を合わせる）」を行うことは、運動・スポーツに子どもを接近させるため、あるいは、馴染ませるためには不可欠なことであると考えられる。

以上、ドイツ・ハイデルベルクでの研修滞在において感じたことを、簡易に綴らせて頂いた。本小論が運動・スポーツの学習を考えるための一助になれば幸いである。

西九州大学

西九州大学健康福祉学部スポーツ健康福祉学科 福本敏雄

西九州大学の前身は、昭和21年に故永原マツヨ先生によって佐賀市に設立された佐賀栄養専門学院である。昭和28年に栄養士養成施設として厚生大臣の指定を受け、昭和29年に準学校法人永原学園、そして、その後佐賀保育専門学校、佐賀調理専修学校を開設し、昭和38年には学校法人として文部大臣の認可を受け、同年4月に佐賀短期大学を開設した。昭和43年には佐賀家政大学を設置し、昭和49年に西九州大学へ名称変更し、現在に至っている。学園として、平成28年に創立70周年の節目を迎える。

西九州大学（健康栄養学部、健康福祉学部、リハビリテーション学部、子ども学部、大学院生活支援科学研究科）は、西九州大学短期大学部、西九州大学附属三光幼稚園、西九州大学附属三光保育園、西九州大学佐賀調理製菓専門学校を有する永原学園の中核を担っている支援系総合大学である。

建学の精神を「高度の知識を授け、人間性の高揚を図り、専門知識と応用技術をもって社会に貢献し、世界文化の向上と人類福祉に寄与する人物を養成する。」としている。教育理念を「あすなろ」の木にたとえ「あすなろう」とし、「多くの困難を乗り越え、明日への希望を抱き辛抱強く生き抜くことが自己の才能を开花させることに繋がる」という自己啓発の重要性を説いている。

キャンパスは佐賀市神園と神崎市神埼町に分かれているが、佐賀駅及び神埼駅から大学の専用バスで両キャンパスへの送迎（神埼キャンパスと神埼駅間のみ無料）を行っている。佐賀市内には、学生寮（女子寮）も完備している。

神埼キャンパスには、第1体育館、第2体育館、健康運動演習室、トレーニング室、野球場（兼サッカー場）、テニスコート、神園キャンパスでは体育館、及び多目的運動場、トレーニングルーム等のスポーツ施設があり、実技の授業やクラブ活動の場となっている。

健康福祉学部スポーツ健康福祉学科は「福祉の心をもったスポーツ人材育成」を目的とし、学生定員50名で、平成25年9月に文部科学省の認可を受け、平成26年4月に開設した。学生は1年生（男子39名、女子8



創設者 永原マツヨ先生



西九州大学外観

名)だけが在籍している。約半数が県内出身者である。将来の希望職種調査では、教員志望が約70%、スポーツ指導員が20%、福祉関係が10%であった。

取得可能な資格・免許は、教員免許（中学・高校保健体育）、健康運動指導士・健康運動実践指導者受験資格、障害者スポーツ指導員（初級・中級）、レクリエーション・インストラクター、公認スポーツ指導者、社会福祉士国家試験受験資格等である。これら資格に関わる科目群を卒業要件のカリキュラムに位置づけている。

1年次に建学の精神に基づいた全学共通の必修科目「基礎演習あすなろう・あすなろう体験Ⅰ」をはじめとし、教養教育科目、語学、健康運動学及びスポーツ



学科新入生宿泊研修会（波戸岬少年自然の家）



新3号館



学科授業風景

健康福祉学科共通必修科目を学修し、2年次以降に専門科目を受講することになっている。

スポーツ健康福祉学科の専門教育科目は「社会福祉関連科目及び健康スポーツ関連科目」からそれぞれ30単位以上修得することを卒業要件としている。

健康スポーツに関する科目は「運動学や生理学、実技等の基礎科目、健康運動支援関連科目、生涯スポーツ支援関連科目、教職に関する科目」を配置し、それぞれの科目群から選択履修することができる。教員免許科目等の資格取得に関する科目群の単位も卒業要件の単位に組み込むことができ、学生の負担を軽減している。また、健康産業施設等現場実習、地域スポーツ実践演習、インターンシップなど現場体験学習を通し

て理論と実践の往還ができ、より確かな知識の修得を可能にしている。

現在、講義及び実習は既存の教室やスポーツ施設で行っているが、本年10月末には講義室及び研究棟（新3号館）が完成した。より良い教育環境を整え、完成年次に向けて学生を迎えることができるよう準備を進めている。

部活動の先生に憧れ、自分も将来そうありたいという願いが学生の進学の動機になっているが、少子高齢化が進み、東京や大阪等の都会では教員採用が困難な時代を迎えている。佐賀県においては、今後10年は安定しているが、それ以降は厳しい時代を迎えることになる。介護福祉関係については高齢化に向けて就職希望・就職率は良かったが、業務内容の厳しさ、給与等の問題から減少傾向にある。健康産業についても経済情勢に左右される状況である。このような中で学生の希望を成就させるべく面倒見の良い学科を目指して準備をしているところである。

また、中学教員の業務の過重負担が問題になっているが、学校教育内活動として位置づけられている部活動についても検討する時期に来ている。学校の施設を使っただけの部活動と地域社会の施設を使用する部活動では保護者の負担が大きく異なる。学校教育内部活動が社会体育として成立するようになれば、教員の負担は軽減し、スポーツ指導員も職業開拓が進むのではないかと密かに願っている。